

何を大切に生きていくか

[聖書]ダニエル書 1章1～21節

ユダの王ヨヤキムが即位して三年目のことであった。バビロンの王ネブカドネツアルが攻めて来て、エルサレムを包囲した。主は、ユダの王ヨヤキムと、エルサレム神殿の祭具の一部を彼の手中に落とされた。ネブカドネツアルはそれらをシニアルに引いて行き、祭具類は自分の神々の宝物倉に納めた。

さて、ネブカドネツアル王は侍従長アシュペナズに命じて、イスラエル人の王族と貴族の中から、体に難点がなく、容姿が美しく、何事にも才能と知恵があり、知識と理解力に富み、宮廷に仕える能力のある少年を何人か連れて来させ、カルデア人の言葉と文書を学ばせた。王は、宮廷の肉類と酒を毎日彼らに与えるように定め、三年間養成してから自分に仕えさせることにした。

この少年たちの中に、ユダ族出身のダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤの四人がいた。侍従長は彼らの名前を変えて、ダニエルをベルテシャツアル、ハナンヤをシャドラク、ミシャエルをメシャク、アザルヤをアベド・ネゴと呼んだ。ダニエルは宮廷の肉類と酒で自分を汚すまいと決心し、自分を汚すようなことはさせないでほしいと侍従長に願い出た。神の御計らいによって、侍従長はダニエルに好意を示し、親切にした。侍従長はダニエルに言った。「わたしは王様が恐ろしい。王様御自身がお前たちの食べ物と飲み物をお定めになったのだから。同じ年ごろの少年に比べてお前たちの顔色が悪くなったら、お前たちのためにわたしの首が危うくなるではないか。」

ダニエルは、侍従長が自分たち四人の世話係に定めた人に言った。「どうか わたしたちを十日間試してください。その間、食べる物は野菜だけ、飲む物は水だけにさせてください。その後、わたしたちの顔色と、宮廷の肉類をいただいた少年の顔色をよくお比べになり、その上でお考えどおりにしてください。」世話係はこの願いを聞き入れ、十日間彼らを試した。十日たってみると、彼らの顔色と健康は宮廷の食べ物を受けているどの少年よりも良かった。それ以来、世話係は彼らに支給される肉類と酒を除いて、野菜だけ与えることにした。

この四人の少年は、知識と才能を神から恵まれ、文書や知恵についてもすべて優れていて、特にダニエルはどのような幻も夢も解くことができた。ネブカドネツアル王の定めた年数がたつと、侍従長は少年たちを王の前に連れて行った。王は彼らと語り合ったが、このダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤと並ぶ者はほかにだれもいなかったため、この四人は王のそばに仕えることになった。王は知恵と理解力を要する事柄があれば彼らに意見を求めたが、彼らは常に国中のどの占い師、祈祷師よりも十倍も優れていた。ダニエルはキュロス王の元年まで仕えた。

[序] バビロン王に仕えたダニエル

11月に入りました。今月はエゼキエル書に続く**ダニエル書**を学びます。ダニエル書の舞台はユダ王国を滅ぼしたバビロン帝国の宮廷です。祖国の滅亡を同じく体験しながら、エルサレムで預言者として生きてきた壮年の**エレミヤ**は、そのままエルサレムに留まって預言活動を送り、やがてエジプトに連れて行かれて死にました。エルサレムの祭司の子だった26才の**エゼキエル**は、捕囚の人々の間で預言者として活動を続け、バビロンで生涯を終えます。一方エルサレムの王族・貴族の家の子として育った少年**ダニエル**は、バビロン王とペルシャ王に仕えて、**宮廷で生涯を送りました**。三人三様です。

[1] 自分を汚さない信仰

さて今日は**ダニエル書の第1章**です。バビロン王ネブカドネツアルはユダ王国から連れてきた捕虜の中から優秀な若者を教育訓練して、バビロン帝国の 世界統治に役立てようと考えました。特に王族・貴族の中から、これだと思う少年を選んで特別に**宮廷で3年間養成訓練**をして、その中から自分の身近に仕える者を得ようと思いました。その候補者の中に、**ダニエルと3人の友人**も選ばれたのです。少年とありますから恐らく中学・高校生位の年頃でしょう。

彼らは先ず、カルデア風に名前を変えさせられました。さあお前たちはもうユダヤ人ではない。カルデア人になったのだぞというのです。その上で**宮廷の食事**を毎日与えられることになりました。エリートとしての**特別扱い**です。そしてカルデア人の言葉と文書(モンジョ)を学ばせられました。ところがダニエルたち4人は、バビロン王の宮廷の食事**で自分を汚すまいと決心し、食べ物は野菜と水だけ**にしてほしいと侍従長に申し出たのです。

大国バビロンの侍従長と、小さな国ユダから捕えられてきた少年たちです。ごちゃごちゃ言わずに王様の命令に従えと叱りとばされても当然です。しかし**侍従長**は穏やかに対応してくれました。「お前たちの申し出を受け入れて、お前たちの顔色が悪くなったら、私の首が危くなるではないか」ダニエルたちは侍従長が選んだ世話係にも重ねて頼みました。「どうか10日間試してください。そして私たちと他の仲間と比べてみて、その上で決めてください」侍従長はこの少年たちの言い分を受け入れてくれたのでした。

10日たってみると、ダニエルたち4人の**顔色と健康**が宮廷の肉類と酒を食べていた者たちよりも優れていました。そこで4人は肉類と酒を除いた野菜と水だけで3年間の養成期間を送ったのでした。9節に「**神の御計らいによって**」と記されています。神が彼らの純真な信仰を喜び、侍従長が好意をもって少年たちに対応するように導いて下さったのです。まさに**見えざる神の働き**でした。

主なる神の民としての契約の書・律法には、**清い生き物と汚れた生き物**とがきちんと区別されています。しかも生き物の**血**については特別な思いを持っていて、食べる場合の血抜きは徹底していました。そこで宗教の違う**外国人と食事を共にしないユダヤ教徒**のひき起こす衝突が、新約聖書のあちこちにも記されています。しかしダニエルが**断った理由**は、それだけではありませんでした。

[2] 神の守りと恵み

ここで、捕虜として遠い敵国に連れて来られた、少年**ダニエル**たちの**立場**に立って考えてみましょう。彼らは王族・貴族の子どもとして、エルサレムでは一番恵まれた生活を送って来たのです。ところが人生が激変し、遠く離れた**異国の地**で、捕囚として生きねばならなくなりました。

「自分たちは、これからどうなるのか?」。26才のエゼキエルでも、**絶望**の暗雲に襲われていました。中学・高校生位の多感な少年として、なおさら**不安**でいっぱいだったに違いありません。そこに思いがけない**出世のチャンス**が舞い込んできたのです。宮廷で3年間の養成訓練を受けて、王の身近に仕える者にしてもらえるという話です。「王から気に入られて、宮廷で働けるこの**チャンス**をものにしたい」。誰しもが必死になるのではないのでしょうか。

それに、栄養のバランスのとれた食事こそ、老人に至るまで**心身を健やかに過ごす基本**です。育ち盛りの少年にとってはなおさらのこと、宮廷の食事をいただけるとは願ってもないことです。ところがダニエルたちは、宮廷の食事を断り、**野菜と水だけ**にしてほしいと申し出たのでした。どうしてでしょうか?「**自分を汚すまいと決心し**」(1:8)——これはどういう意味でしょうか。

思うに、国王の食べ物は神に捧げられてから食卓に運ばれました。ですから宮廷の食事**で養わ**

れることは、バビロンの神に捧げられた食べ物を食べることで、即ちその神の加護にあずかることを意味します。ところがダニエルたちは、自分の心も体も、神が深い御心をもって創り、この自分にお与え下さったものだという信仰をしっかりと持っていたのです。そこで、真の神ではない神、偶像に過ぎない神に捧げられたご馳走に養われて、真の神から授かった自分の体を汚すことは出来ないと思ったのです。

自分の出世・栄達も大事です。でも神の御心にかなう生き方をすることの方がもっと大切、人生の基本だと思ったのです。これは、この少年たちが自分で身に着けた信仰というよりも、彼らが生まれ育った家庭教育の賜物ではないでしょうか。ユダ王国を滅ぼすような王族貴族たちでしたが、家族一同の信仰、それに基づく家庭教育は間違っていなかったのです。自分たちの心と体は、神から与えられたものなのだから、清いものとして大切に守り育てていかなければいけないと、子どもながらに信じていたのです。

そこで神も、彼らの信仰に応じて、健康ばかりでなく、学問・知識・能力においても優れた若者に育ててくださったのでした。17節をご覧ください。「この4人の少年は知識と才能を神から恵まれ、文書や知恵についてもすべて優れていて、特にダニエルはどのような幻も夢も解くことができた」と記されています。

生まれながらに優れた能力が備わっていたというのではなく、神が恵みとして与えて下さった知識・才能によって、心身ともに成長できたと聖書は語っています。その結果この4人は、3年間の養成期間を終えると、国王のそば近くに仕えることになったのでした。

[3] 愛の配慮

ではこの点に関して、イエス・キリストの救いにあずかった信仰者の信仰を、新約聖書から学ぶことにいたします。ダニエルたちは、神ならざる神、すなわち偶像に先ず捧げられた王宮の肉類と酒で自分を汚すまいと決心しました。ところがパウロは「世の中に偶像の神など存在しないのだから、偶像に供えられた肉かどうかで心配する必要などない」と言い切っています（Iコリント8:4）。

しかし同時にパウロは、偶像に備えた食べ物は食べないとしている人の信仰をも尊重して、その人をつまづかせないように、愛の配慮を勧めています。そして「わたしの兄弟をつまづかせるくらいなら、兄弟をつまづかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません」（Iコリント 8:13）とさえ言っています。すなわち「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すために」（Iコリント 10:31）を心がけていくのです。我が身第一ではなくて、他者へのいたわりと配慮という愛が行動原理になっています。

「青年よ、大志を抱け」で有名な W クラーク博士は、札幌農学校に赴任する時、アメリカから持参したウイスキーと葉巻を海に投げ捨て、代わりに聖書をもって教育することを 黒田長官に強く求めて承認させました。彼が横浜の路上で昼日中に、酩酊狼藉を働く若者の姿を幾人も見かけたから

でした。前途ある有能な若者を、あたら酒・たばこで滅ぼさせてはならないと、自分に強く言いかけさせて、札幌時代、禁酒禁煙を通したのだそうです。

ここで**お酒**についての、私の体験を証させていただきます。私は若い時は、社交上すすめられれば飲むという立場をとっていました。しかし私が目白の副牧師時代に、**学生センターの主事を代行**していた時のことです。センターに泊まって管理人をしてくれていた**実に真面目な大学生**が居ました。新潟の出身で父親とよく酒を飲み合う育ちでしたが、上京してクリスチャンになり、**断酒**しました。ところが或る晩、ウイスキーをガブ飲みして**狂乱状態**になり、学生センターのホールの窓ガラスをたたき割り、床の上をのたうちまわりました。電話で通報を受けタクシーで駆けつけた私は、彼を押さえつけようと格闘しましたが、遂に119番に電話して**緊急入院**させました。私も負傷しました。**失恋**してたまらなくなり、夜の街に出て行ってウイスキー瓶を買ってきて、一気に飲みほしたのでした。

私はこの好青年をこのように狂人にする**酒の恐ろしさ**に身震いしました。新潟の農家の長男として育ち、一日野良仕事に精をだした父親と、東京の大学を目指して勉強に励む高校生の息子が、酒を酌み交わして夕食をとる——**麗しい家族団らん**の暮らしです。しかしそれが、息子の人生を狂わせる要因になったのです。私は酒の恐ろしさに身震いしました。そしてアルコールを手にしなくなりました。

【結】何が一番大切な事か

良い学校、良い就職、良い結婚、良い住居、そして**良い人生**を全うしたいと、誰しもが願います。学習塾通いが増えています。同時に**いじめ**による自殺他殺が増え、児童虐待、家庭崩壊、貧困家庭、子ども食堂等々のニュースが毎日報じられています。私たちにとって、**何が一番大切な事**なのでしょうか？

少年ながらダニエルたちは、真の神から与えられた**自分のこの心と体を汚さない**ことを、何よりも大切に生きていこうをしました。すると**神が守り**、助けて下さり、この少年たちを、健康に於いても、知識、才能に於いても**秀でた青年**に育てて下さいました。

神は天地万物を甚だ良いものとしてお造りになり、その管理を私たち人間にお委ねになりました。しかし私たちは**善悪の判断**だけは**神に聞く**ようにとの 御心を見失って、**自分の判断**で行動し、世界をこのような罪に満ちたものにしてしまいました。

しかし神は、**イエス・キリスト**となってこの世に来て下さり、その生涯と十字架の死・復活をもって、私たちとこの世界の**救いの道**を開いてくださいました。**何を一番大切に生きていくか**——イエス・キリストを通して語りかけて下さる**神の言葉**に聞き従って生きることです。

ダニエルたちは、イエス・キリストを知らずに生き、死にました。しかし真の神から頂いた**この心と体を汚さず**に生きていこう、そうすれば、神も必ず、その時その時にかなった、助けと導きを与えて下

さるといいう信仰の証を、今日も私たちに語りかけてくれているのではないのでしょうか。

ダニエルたちにこの様な信仰教育を与えた親たちは、本当に偉いですね。私たちも、見習わねばなりませんね。「主を畏れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは分別の初め」(箴言 9:10)。

祈ります: 神さま、少年のダニエルたちは、自分の心と体とはあなたからいただいたものだから、汚してはいけないという単純な信仰に立って、自分たちの歩みを貫きました。あなたはその彼らを守り、恵み、祝福してくださいました。私たちも自分の心と体を汚さず、清く守っていくことを、何よりも大切にして、あなたに用いられつつ生きるものにしてください。またダニエルの親たちのように、我が子や孫たちにその信仰を与える者にして下さい。イエスさま、私たちの愛する子や孫たちを助け、導いて下さい。救い主の御名によってお祈りします。 アーメン